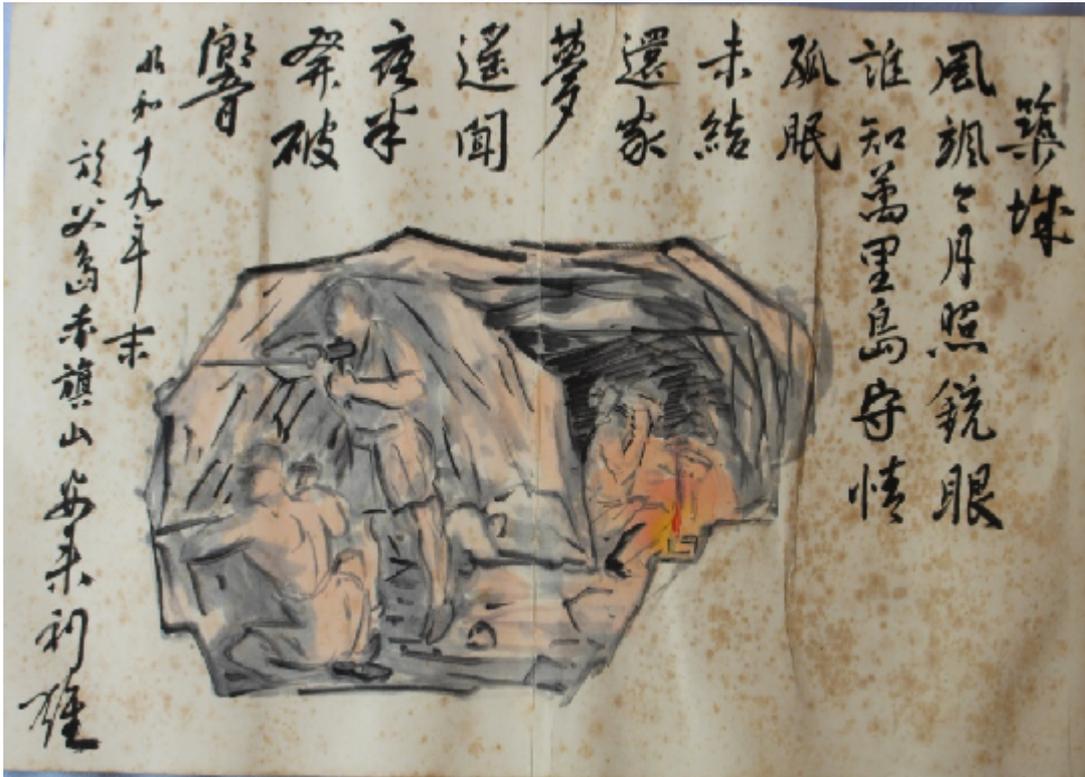


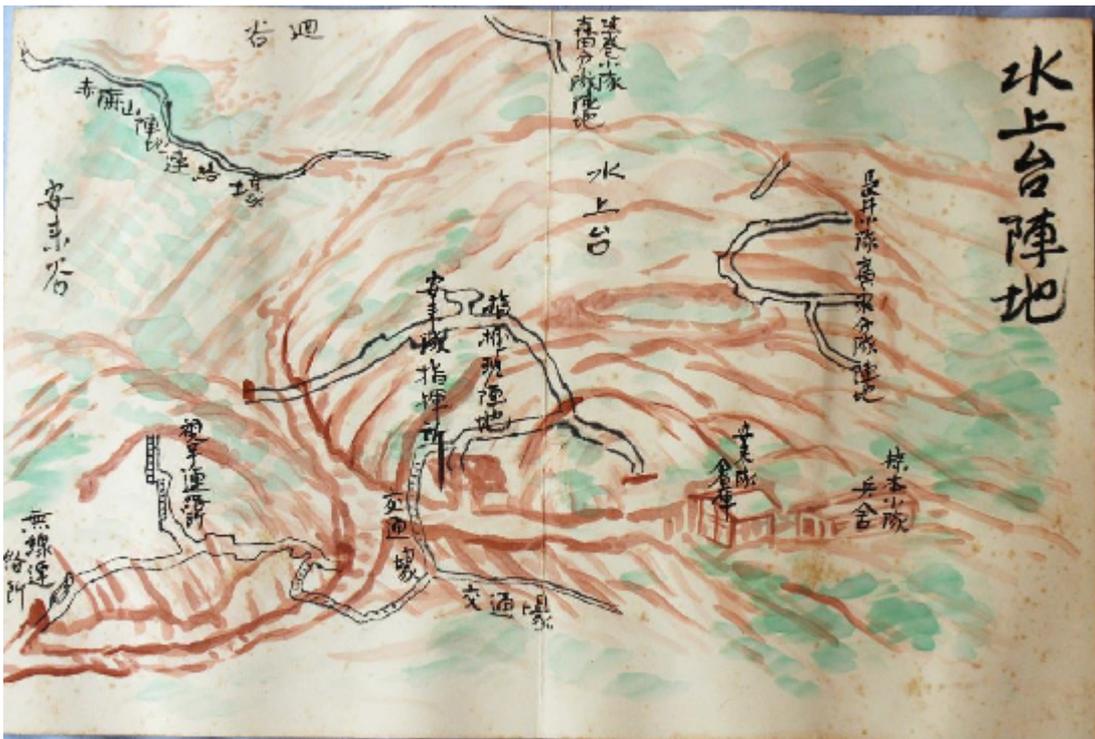
20 築城

風颯夕月照銃眼 誰知萬里島守情 孤眠未結還家夢 遙聞夜半發破響
 昭和十九年末 於父島赤旗山安來利雄



21 水上台陣地

長井小隊広永分隊陣地 掠本小隊兵舎 安来隊倉庫 笠巻小隊森田分隊陣地
 指揮班陣地 安来隊指揮所 赤旗山陣地連絡壕 視号連絡所 無線連絡書



22 東旗山頂有感

視獨登東旗山頂 萬日落漠太平洋 南嶋戰友化皆鬼 空隔幽明月下笑

昭和二十年四月 安来利雄



- 23 **現地自活** 赤旗山西南側廻谷の一帯は海上百五十乃至貳百米の台上で、安来隊指揮班及笠巻小隊が昭和十九年八月一日より二十年十一月末迄其の棲息地として居た印象深き地域である、道をつけ、家を建て、井戸を掘り、畑を開き、或は養鶏養蜂、牛、豚飼育、製塩、製糖、農具の製作等爆撃跡の鉄片と現地製炭を原料とする野鍛冶を唯一の手段として生きんが為めの現地自活は次第に拡充せられ、漸く生命を維持する程度に至りたるも水質不良且つ少量、加えて雲霧の日多く湿度常に高く衛生状態は最悪であつた、図は笠巻小隊第四分隊棲息地より見下ろした処、眼下のトタン屋根は故笠巻氏の家三ツの墓標の前が点呼場、左の木の下に米搗場、其の向の樹木の中に指揮班の家、右へ井戸炊事場、薪小屋、その向ふに屋根少し見えるのが給養掛の家、薪小屋の裏が鶏舎、其処から畑の右側を飛石伝ひに松林に登つて洗面所と便所と隊長室と是れが安来隊の本拠、谷の向ふの岩盤の下部に隊長用防空壕、鶏舎の前の畠は胡瓜と里芋、稜線近く黄色く見えるのが栗、其他は甘藷や夏大根、印度南瓜は箱で苗造り、薪小屋に二十四榴の薬莢を吊つて警鐘とし、殷々日課を報じた



24 慰靈祭 昭和二十年八月十五日 於赤旗山麓

戦没者 故川上文吉 故石原当則 故杉山金蔵 故岡崎熊市 故野村房雄 故米山利市
故高橋郡市 故山根栄三郎
終戦後死亡者 故笠巻孝祐 故大場治久 故山内俊雄



25 進駐式 昭和二十年十二月十二日 於父島大村





富士見ゆ
昭和二十年十二月十九日
拂暁

昭和十九年二月二十九日浜田聯隊 第二七一六部隊入隊 出征
陸軍中尉 安来利雄 辰年 四拾歳



昭和十九年二月二十九日
浜田聯隊
第二七一六部隊入隊
出征

陸軍中尉 安来利雄

辰年
四拾歳

札正

札正

安来利雄作絵日記『父島』解題

3 昭和十九年二月二十九日 第二七一六部隊編成

西部第三部隊長 大津重雄大佐訓示

大津重雄は、昭和十八年八月に陸軍大佐に任命されている。

西部第三部隊

島根県伊藤善隆手記「私の人生」大正十年二月九日生まれ、昭和十五年三月一日に鳥取県米子市米子駅(国鉄)に採用、昭和十八年に徴兵検査で甲種合格、昭和十八年十二月十日に島根県浜田市西部第三部隊に入営、数百人の同年兵は各班に分散、伊藤は歩兵中隊指揮班観測隊に配属、中支派遣として中国大陸へ、その後シベリア抑留を経て、昭和二十三年九月に帰国し故郷での生活となる。

4 日昌丸

南洋海運により 1939 年(昭和 14)年竣工、蘭印のジャワ島行き航路の花形客船、昭和 15 年には第二次日蘭会商では日本側主席代表の小林一三商工大臣や芳沢謙吉元外務大臣のパタピィア入りに使用された。戦争時には蘭印在留邦人の引き上げに用いられる。昭和 16 年以降は、日本陸軍により軍隊輸送船として徴用、昭和 18 年にはパラオ・ハルマヘラ島・ニューギニア島西部方面への輸送任務に従事する。昭和 19 年(1944)にはフィリピン戦に向けたルソン島への造園部隊輸送の船団となる。戦後は巡航見本市船となる。昭和 40 年に解体。

第五十七要塞歩兵隊は、昭和 19 年 3 月 1 日に浜田兵舎から浜田駅に進発、浜田隊等の各歩兵隊は東京に集結し、昭和十九年三月十七日に芝浦港から日昌丸によって父島へ出港した(図 4)。

要塞重砲兵連隊

要塞砲兵第 1 連隊 - 東京湾要塞砲兵連隊に改称・要塞砲兵第 2 連隊・要塞砲兵第 4 連隊・東京湾要塞砲兵連隊、横須賀重砲兵連隊に改称・横須賀重砲兵連隊 - 東京湾要塞重砲兵連隊に改編・東京湾要塞重砲兵連隊・対馬要塞重砲兵連隊・壱岐要塞重砲兵連隊・下関要塞重砲兵連隊・馬山重砲兵連隊・釜山要塞重砲兵連隊・由良要塞重砲兵連隊・深山重砲兵連隊 - 重砲兵第 5 連隊(II)に改編・函館重砲兵連隊 - 津軽要塞重砲兵連隊に改編・津軽要塞重砲兵連隊・宗谷要塞重砲兵連隊・麗水要塞重砲兵連隊・舞鶴重砲兵連隊・**父島要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 9 連隊に改編**・奄美大島要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 6 連隊(II)に改編・豊予要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 18 連隊に改編・長崎要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 17 連隊に改編・澎湖島要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 12 連隊に改編・旅順要塞重砲兵連隊・高雄要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 16 連隊に改編・基隆要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 13 連隊に改編・永興湾要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 15 連隊に改編・羅津要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 14 連隊に改編・中城湾要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 7 連隊に改編・船浮要塞重砲兵連隊 - 重砲兵第 8 連隊に改編・佐世保重砲兵連隊

5 昭和 19 年 3 月 22 日

船団 37 隻 東京湾出航

6 昭和 19 年 3 月 26 日

安来隊父島上陸

日昌丸に乗船した要塞隊は、南方諸島に部隊ごとに配属されたのか。

10 昭和 19 年 5 月 6 日に「糧秣到着」とあるように、このころまでは日本本土との輸送が継続していた。

11 北初寝糧秣庫、石浦弾薬倉庫の存在

「初寝隊長宅」は、父島での安来隊との関係は

13 昭和 19 年 6 月 15 日

父島における米国艦載機の攻撃、延べ 400 機、父島攻撃第一回。

14 昭和 19 年 7 月 19 日

払暁、米機二機来襲。大村海軍施設攻撃。倉庫焼失。要塞司令部の軍用資材は、大部分焼失する。

15 昭和 19 年 7 月 24 日 己同部隊による艦載機攻撃、終日空襲、延べ 500 機の来襲。旅団長の全島への指令。立花少将を中心として全員一致しての父島防衛のこと。ただ、全島混乱する。

陸軍少将立花芳夫、後に中将に昇進し、父島方面特別根拠地に駐留する。戦後、戦犯として処刑。

16 昭和 19 年 7 月 27 日、第三〇六大隊は清瀬から袋沢へ移動の命。移動中に、各部隊に分散、雨期ともなり、食糧窮乏、死者とともに患者の続出。

17 各部隊の配備 第三小隊は安来谷に配備。 安来谷とは、安来部隊長の名によるか。

20 築城

風颯々トシテ月銃眼ヲ照ラス

誰レカ知ラン万里ノ島ヲ守ル^{こころ}情ヲ

孤^{ひと}リ眠ライマダ結バス家ニ還ルノ夢

遙カニ夜半発破ノ響キヲ聞ク

昭和十九年末 父島赤旗山ニ於イテ 安来利雄

安来利雄詠の七言絶句、承句の第二句「情」と結句の第四句「響」は韻。岩盤洞窟で夜の詠。昭和十九年末とするので、十二月の作品か。

南の島とはいえ、年の暮れとなり、夜の風は寒々と吹き、銃眼には月の光が照らしているだけである。

誰がしるであろうか、このような日本から遥か遠く離れた島で、このように兵士たちが要塞で守備についていることを。

独り眠りにつけないまま、ただ故郷に帰る夢を見るだけである。

遥か遠くで、砲撃の爆破音が夜中に響きわたる音が聞こえてくる。

21 水上台陣地

各隊の配置の陣地。安来隊の倉庫、安来隊の指揮所もあり。

22 漢詩

赤旗山頂ニ感有り

独り赤旗山頂ニ登リテ視ルニ

萬日落漠トス太平洋

南嶋ノ戦友皆鬼ト化ス

空シク幽明ヲ隔ツ月下ノ笑^{しょう}

昭和二十年四月

安来利雄

赤旗山頂での感懐の漢詩。「頂」「洋」「笑」の韻を踏む七言絶句。

独り赤旗山の頂に登り、あたりを見まわすと

すべてのものが寂莫とし、ただ太平洋が遥かかなたへと広がってるだけである。

南島の島での戦友は、皆鬼となってしまった。

むなしく鬼と化した戦友はあの世と隔てられてしまったが、今私が目にするのは、ただ月の明かりがむなしく照り輝いているだけである。

23 現地での自活生活

赤旗山の西南の谷の一角は、台上になっていて、この陣地は安来隊指揮班と笠巻小隊が昭和十九年八月一日から昭和二十年十一月まで棲息地としていた場所である。そこでは道をつけ、家を建て、井戸を掘り、畑も開墾し、時には鶏を飼い、養蜂もし、牛、豚を飼育、製塩、製糖、農具の製作までしてきた。爆撃の跡地で見つけた鉄片を用い、そこで作った炭で鍛冶もして農具を生産し、それで畑仕事をして唯一の生きる手段としてきたのである。兵士達とともに現地での自活生活は次第に拡充していき、次第に命をつなぐ程度の生産はできるようになってきた。ただ、水質が悪く、しかも少量しかなく、天候は曇り空で霧の日が多いだけに、湿度が高く、衛生上は最悪の生活環境であった。図に示したのは、笠巻小隊第四分隊の陣地から見下ろした場面で、眼下のトタン屋根は戦没した笠巻氏が住んでいた家、三つの墓標の前が点呼場、左の木の下には米搗き場、その向かいの樹木の中に指揮班の家、右には井戸と炊事場、薪小屋、その先に少し屋根が見えるのが給養掛の家、薪小屋の裏には鶏舎、その家から畑の右側を飛び石伝いに松林を登ると、洗面所と便所と隊長室、これが安来隊の本拠地である。谷の向こう側の岩盤の下部に隊長用の防空壕、鶏舎の前の畠には胡瓜と里芋、遙か向日の黄色に見えるのが栗、そのほかには甘藷や夏大根、印度南瓜は箱で苗を作りをする。薪小屋には二十四榴の薬莢を吊るして危険を知らせる警鐘とし、毎日轟くような音を伝達していた。

24 慰霊祭

昭和二十年八月十五日に赤旗山の麓で催しているのが、敗戦になった報を知ったのであろう。そのため、島での戦没者の慰霊祭をしたものと思われる。戦没者は安来班と笠巻小隊の兵士であらう。「戦没者」として七名、「終戦後」の死者として三人の名を記す。

25 進駐式

日本の敗戦とともに、九月には父島、母島など米軍の占領下に置かれる。硫黄島のような地上戦はなく、艦船からの砲撃だけだったようである。すでに米軍により武装解除はなされていたのであろう。安来隊などは、農作物や家畜の飼育をしてその後も父島で生活をし、米軍の艦船上陸は十二月十二日になったようである。その上陸式があり、日本兵たちは整列してそれを出迎えたのであろう。

その後、米国艦船によるのか、残存した日本兵は帰国を許され、十二月十九日の払暁には富士山の姿を目にしたようである。

なお、安来班などが陣地としたのは、現在の地図からすると、父島の二見港に面した東部であったことなどは、初めに描かれた地図と重ねて見ることができる。